

11 番（小川義昭君）

市長から久しぶりに前向きな答弁をいただきました。どうか実施に向けてよろしく願います。

「健康都市 白山」を宣言した本市では、山田市長がみずから5月末に大阪府で開催されたスマートウェルネスシティ首長研究会に出席されるなど首長の率先による果敢な動きが見られ、まことに心強く好ましい動向だと拝察しています。

今月29日には、健康都市宣言を記念する講演会を開催し、元読売巨人軍の投手、桑田真澄さんを講師にお迎えする運びとなっていますが、こうした市民への啓蒙活動に今後も何とぞ心を砕いていただき、山田市長には文字どおり「健康都市 白山」のトップランナーとして御活躍をいただきたいと念じています。

それでは、次に昨日も田代議員が質問されましたひきこもり問題についてお伺いいたします。

最近ひきこもりが起こしたと表現される惨劇が川崎市や東京都で相次ぎ、社会問題化しています。川崎市では、登校途中の小学生たちに包丁を持って襲いかかり、小学6年の女児と男性の保護者を刺殺した後、無職の男が自殺した事件に衝撃が走りました。

その数日後、東京では元農水省次官の70代男性が家庭内暴力を繰り返す40代の長男を殺してしまうというショッキングな事件が起きています。

この2つの事件に共通するのは、児童を襲った男、父親に殺された男性がともにひきこもりと呼ばれる日常を過ごし、年老いた親の年金や蓄えを糧に生きていたという点であります。

一般論になりますが、近年になり高齢の親の介護を機に離職し、親の年金で暮らしながら長期間にわたる介護中心の生活を送るうち再就職が難しくなり、求職活動もしなくなる40代、50代の独身者がふえています。

このような働くことをあきらめ求職活動をしない人は、雇用統計には反映されず、労働市場から消えた状態となっているため、労働経済学の専門家はミッシングワーカー（消えた労働者）と呼んでいます。その数は実に103万人にも及び、ハローワークなどで求職している40、50代の失業者の72万人を大きく上回っているのが現状であります。

このような中、最近になって8050問題という深刻な社会問題も浮上してきました。8050問題とは、ひきこもりの子を持つ家庭が高齢化し、50代の中高年のひきこもりの子を80代の年老いた親が面倒を見るケースを指し、今まさに社会問題と化しています。さまざまな報道によれば、川崎の事件、東京の事件とも個々の家族関係、事件のいきさつは異なりますが、背景には8050問題が根ざしているとの見方が強まっています。

ひきこもりは、仕事や学校に行けないまま家にこもり、家族以外とほとんど交流のない人、あるいは家族とさえ交流しない状況を指します。一般的には10代から20代の若者の問題として捉えがちでしたが、ひきこもりの問題が顕著化した1980年代、90年代から30

年ほど経過する間に当時の引きこもり世代が社会に出る機会を逃したまま今日までひきこもりを続けて50代になろうとしている例が少なくないとみられています。

親に頼りきった生活を送ってみずからの収入がなく、仕事を退職した親の家計も厳しくなるうちこうした家庭では親子ともども世間から孤立しがちです。やがて精神的に追い詰められた子供が親に対し暴力をふるい、それに耐えかねた親が将来を悲観して我が子に手をかける事件などがふえつつあることは、今回の東京で起きた事件の経緯を見ても明らかであります。

かねてから指摘されていたかかるひきこもりの長期化と高齢化に対応し、内閣府は昨年初めて中高年を対象に実態調査をしています。ことし3月に公表された調査結果によると、40から60歳の年齢層でひきこもり状態にある人は、全国推計で61万3,000人にも上っています。この数字は15歳から39歳を対象にした調査で推計した54万1,000人よりも多く、今回の内閣府の調査は、ひきこもりが決して若者特有の現象でないことを物語っています。

中高年のひきこもりの場合、最も多いきっかけは退職で、ひきこもり期間が7年以上の人が半分近くを占めています。その多くは父親か母親が生計を立てており、中には親の年金頼みというケースも少なくありません。このため生計を支える親の老いが進むにつれ生活の困窮が進み、生活保護受給世帯の増加が危惧されています。

政府にあっては、根本厚生労働大臣が新しい社会問題と危機感を示していますが、大人のひきこもりの増加は、社会に暗い影を落とす深刻な事態であり、その要因や背景を分析し、対応策に本腰を入れる必要があります。

こうした状況の中で、生活保護受給者以外の生活困窮者に対するいわゆる第2のセーフティーネットの充実強化を目的として、2013年12月に生活困窮者自立支援法が成立し、2015年4月から施行されています。私は創設から5年目になる生活困窮者自立支援制度がひきこもりの人たちの支援にどう生かされ、どのような問題点があるかを分析することがまず重要であると強く認識するものですが、そこで数点にわたって質問いたします。

1点目、最初に本市における14歳まで、15歳から39歳まで、40歳から64歳までの年代別のひきこもり状態の現状についてを伺います。

2点目、ひきこもりに陥り思春期に社会とのかかわりを持てなくなった場合、大人になってからの適応がさらに難しくなると言われており、思春期のひきこもり対策は重要な課題といえます。本市における若い世代のひきこもりの実態について御答弁をいただき、その上で長期化防止、社会復帰への支援策などの取り組みについてお伺いいたします。

3点目、本市にも間違いなく8050問題は潜在していると考えていますが、このような深刻な社会問題を行政としてどのように認識し、今後どのように対応していくのかお伺いいたします。

4点目、生活困窮者自立支援制度が創設されことしで5年目となりますが、この制度がひきこもりの人たちの支援にどう生かされ、今後どのような問題点があるのかをお伺い

たします。

5点目、市社会福祉協議会は、くらしサポートセンターはくさんを設置し、生活困窮者自立相談支援事業など幾つかの支援事業に則して市民の相談を聞き、一人一人に適した支援対策を行っているとお聞きしていますが、相談件数の推移や課題などその実態についてお伺いいたします。

今後の相談支援体制の強化についてもどのようにお考えなのかお伺いいたします。

最後の6点目です。ひきこもり担当部署においてこれまでどのような取り組み成果があったのでしょうか。具体的にお答えください。

また、ひきこもりサポーターやひきこもり支援従事者を初めとする支援人材の育成が不可欠ですが、今後どのように取り組んでいかれるのかお伺いをいたします。